

同志社大学国文学会彙報

〈同志社国文学〉 第三九号 一九九三年二月二〇日発行

第四〇号 一九九四年三月二〇日発行

一九九三年国文学会活動状況

〈新入生歓迎会〉 四月五日 新島会館

〈国文学会総会〉 六月二七日 本学 今出川校地 至誠館三階会議室

・総会

・研究発表会

「中一国語の授業

——ヘルマン・ヘッセ『少年の思い出』——

白瀬浩司（大谷中学・高等学校教諭）

「狂言の番外曲雑考

——天理堀村本をめぐって——

稲田秀雄（日吉ヶ丘高等学校教諭）

・報告

「東アジアにおける日本語の研究と教育

——台北・東呉大学でのシンポジウムから——

玉村文郎（本学教授）

〈国文学会会報〉 第二二号 一九九四年三月二〇日発行

一九九三年度卒業論文題目

大伴家持の越中三賦について

安芸 幸司

「言霊」と旅の無事を祈る歌

——遣唐使に贈られた歌を中心に——

今西 由紀

「笠女郎贈」大伴宿禰家持「歌廿四首」についての考察

——歌群の巻四における位置づけを中心にとして——

喜多 香子

防人歌の場

——詠唱の場をめぐって——

藏 亮太郎

大伴家持における亡妻挽歌の意義

——歌人としての出発点を探る——

小柳 仁美

笠金村作歌による志貴皇子挽歌の論

——火を中心に——

鞍谷 伸子

ヤマトタケル（倭建命）物語における歌謡の意義

——「大御葬歌」を通して——

増田 俊子

「海の旅の歌論」

——『万葉集』遣新羅使人歌群をめぐって——

長門 聡

万葉集における「みやび」と「遊び」について

—— 卷十、一八八〇〜一八八三番歌を中心として ——

中 平 み ぎ

中臣宅守と狭野茅上娘子贈答歌群の考察

—— 実作説と虚構説をめぐって ——

田 井 順 子

「大鏡」と「日本紀」の方法

藤 木 真 澄

「職の御曹司におはしますころ」についての考察

藤 本 修 司

「更級日記」 夢考

—— 孝標女の希求 ——

大 藪 佳 洋

「なにがしの院のものけ」

下 平 英 治

苑池と邸第の伝承

—— 河原院への視線 ——

田 淵 吉 弘

「宇津保物語」の楽

—— 俊蔭の琴をめぐって ——

山 中 英 理 子

「枕草子」色彩考

—— 四季と草木の色 ——

米 澤 史

「土佐日記」の方法

—— いわゆる「女性仮託」をめぐって ——

藤 井 邦 考

「竹取の翁」考

斐 承 奎

「太平記」における高師直像の形成

新 子 朋 生

道綱母の精神軌跡

—— 「蜻蛉日記」をたどって ——

江 口 亜 矢 香

延慶本「平家物語」「天」「天道」試論

—— その滅びの論理と叙述形成について ——

石 丸 文 子

謡曲における源義経

—— 子方としての必然性 ——

小 南 佳 代 子

「今昔物語集」本朝部における鬼について

「空白の物語」

—— 敦盛と直実の話の展開に対する一考察 ——

湯 浅 俊 郎

「徒然草」から考える兼好の思想

—— その積極性を中心として ——

王 慧 珍

「平家物語」灌頂巻の一考察

秋成の物語観について

—— 「うちかすむ」を中心として ——

瀬 口 奈 奈

「雨月物語」における怪異と自然描写の関わり

—— 「雨」と「月」を中心として ——

細 辻 保 子

「浅茅が宿」の主題

—— 宮木をめぐって ——

中 埜 有 紀 子

「東海道中膝栗毛」と芸能

—— 浄瑠璃・歌舞伎を中心に ——

米 井 陽 子

「東海道中膝栗毛」の滑稽に関する一考察

—— 弥次郎兵衛・北八の江戸っ子性を通して ——

東 原 雅 典

森 恭 子

『東海道中膝栗毛』における狂言の影響について

——その研究史再考の必要性—— 田畑雅美

「勸進帳」が完成するまで

——七、八、九代目の台本比較による—— 森任子

「心中道行文」の俳諧的表現について

近松浄瑠璃における愁嘆の表現 小川裕子

——心中物の場合—— 岡本早苗

『曾根崎心中』

「観音廻り」について 斎藤りし亜

浄瑠璃『曾根崎心中』観音廻りについて

——諸説の分類を起点として—— 佐藤文隆

近松曾我浄瑠璃の場合

——詞章の典拠と翻案の方法について—— 清水唯由

『妹背山婦女庭訓』四段目成立考

——お三輪像成立を中心として—— 砂山由起江

近世における『道成寺』の継承についての一試論

——『用命天王職人鑑』三段目を中心に—— 山本都子

役者評判記を中心とした初代瀬川菊之丞の考察

——「相生獅子」を中心として—— 山崎薫子

『世間胸算用』考

——複雑な編集過程について—— 金山懐子

『武道伝来記』の一考察

——脱・敵討譚中心の読みを通して——

『好色五人女』について

卷一「姿姫路清十郎物語のお夏像をめぐって」

『日本水代蔵』における卷二の二の位置づけ

——運命がかかわってくるもの—— 松谷桂

『好色五人女』卷三「中段に見る暦屋物語」考

——おさんを中心として—— 山本史子

結核と堀辰雄

堀辰雄の女性観 浦東亮子

福永武彦の芸術家小説

——変奏・「風土」から「海市」へ—— 定葉採子

朔太郎詩におけるエロティシズムの問題について

——中原中也 殉職—— 安藤康英

中原中也

——殉職—— 井上善弘

『倫敦塔』における漱石の内部世界

『虞美人草』論 林悦子

「一篇の主意」を描くまでの経緯をたどって

漱石小説における女性の髪型 山崎絵都子

——髪型に仕掛けられた技巧の跡を読むために—— 池田志緒

漱石の作品に見る落語の影響

三谷美和子

【道草】論

——孤独な自己追求からの帰還——

大原英子

【クララの出家】の主題

——作品成立の背景から——

濱田律

芥川龍之介——「藪の中」における

芥川の女性観と作品構成のつながり

恒岡利栄子

中島敦「古譚」の世界から

張陽一

梶井基次郎

——家族を思う心とその小説への影響——

臼井綾子

横光利一

——「上海」での挑戦——

藤岡陽子

【人間失格】論

——原罪意識をめぐって——

中澤直史

坂口安吾「墮落論」

——「墮落論」にみる安吾の「ふるさと」——

平井みづほ

宮澤賢治「イーハトブ童話」注文の多い料理店

——ルイス・キャロルからの影響——

丸山早苗

最終形「銀河鉄道の夜」

——ジョバンニが得るもの——

野村貫太

宮沢賢治とリンゴ

高木香織

坪田譲治

——童話からのぞく無色の生涯——

岡本真理

新美南吉の創作姿勢の特質

——久助君ものに着目して——

小川由美子

夢野久作「氷の涯」論

——その成立と主題——

稲生貴学

江戸川乱歩論

——浅草六区における興業、見世物と作品の関係についての考察——

大槻誠

澁澤龍彦「高丘親王航海記」における

球体の構造

能勢陽子

アウトサイダー澁澤龍彦

——暗黒領域の探求、そして、超越とは——

岡本和史

【砂の女】論

——安部の思想と女の存在——

上野綾子

開高健における「滅形」

宮本輝——「宿命」と「物語」——

出端憂子

川三部作をもとにして

「沈黙」の四人の登場人物から見る

光島忍

遠藤周作のキリスト教観

三島由紀夫論

石原慎介

——死とエロティシズム——

栗田宏俊

英詩人ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティが与えた

明治期詩人における影響とその後の展開

小林紀美子

大岡昇平のメッセージ

——『俘虜記』論——

近世の蝦夷語彙集とその変遷

補助動詞『やる・もらう・くれる』をめぐる

商品のネーミングの考察

——飲料食品におけるネーミングの調査——

現代日本語の書き言葉における諺について

『万葉集』の形容詞

——その表記について——

『浮世風呂』の副詞についての一考察

昭和流行歌謡曲における人称代名詞

〈ナル〉的表現についての一考察

日本語動詞のアスペクトについて

——〈している〉形による分類——

昭和の世相語、新語・流行語について

現代日本語における略語とその傾向の考察

歌謡曲における二人称代名詞の変遷

『和英語林集成』とJ・C・ヘボンの日本語副詞観

一九九三年度修士論文題目

『今昔物語集』巻第二十七考

——霊鬼と平安京との関連を中心に——

中・日・韓昔話「天人女房譚」の比較考察

武田泰淳論

——初期作品に観る泰淳文学の基盤——

大正期の外来語の諸相——有島武郎・芥川

龍之介の文学作品に見られる外来語——

言語の指示機能とその基点から見た

「コ・ソ・ア」による認知と指示

藤原由利子

茨木伸介

岩崎有見子

北濱澄子

熊野真弓

黒木紀美代

小栗巧

島袋康子

砂田浩克

高橋直浩

西邨美穂

米田祐子

濱中まゆみ

村田昌巳

吉本祐一

金文学

馬場君代

工藤陽子

岸本典子